

東書藝

平成30年4月

<http://www.toshogei.jp/>

日中平和友好条約締結四十周年

第六十五回記念公募 東海書道藝術院展 開幕

いよいよ始まった本展は二会場・二期に亘つての展覧会で、創立六十五周年に日中友好の花開いた記念展。墨痕鮮やかに並んだ両国の作品を、篤とご覧下さい。



会長 風岡 五城

春爛漫の候、今年も盛大に東書藝展の開幕を迎えることが出来ました。開催に向けてご尽力いただいた役員の方、また関係各位の皆様に対し心からお礼を申し上げる次第です。

東書藝ではこれまで五年ごとの節目の年には、何らかの記念事業を行ってきましたが、今回は昨年十一月に開催された「2017東書藝・揚州市友好書法展」がそれに当たります。日中国交正常化四十五周年記念、日中平和友好条約締結四十周年記念に合わせ、また本会の創立

六十五周年を迎える記念としての開催となりました。概要は会報第一三三号にてご案内の通りですが、開会式に合わせて本会から三十七名が訪中し、書を通じた友好親善を深めることができました。これを受けて本展授

賞式・祝賀会には揚州市から訪日団をお迎えし、展覧会場には中国側の作品二十点を特別展示することになっています。国際交流の輪を一層広げる機会になることを念じてやみません。東書藝は創立当初より、この地方における書壇の主導的役割

を果たしてきました。時はめぐり会員の世代交代も進んできていますが、本会の自由で進取の精神は今なお受け継がれ、さらに未来に伝えていかなければならないものです。会員諸氏の一層の奮起を切に願うところで

大賞・宮田杏花氏 準大賞・瀬田霞泉氏

第六十五回展 審査会

第六十五回記念展の審査会は、三月一日、二日の両日、東区東桜会館にて行われた。初日に会友・公募、二日目は会員・準会員の作品を審査。一点一画の細部まで緊張感をもって厳しく審議がなされる。同点決勝も何度かあったが、判定は公平・公正に進んでいった。

午後、大賞に宮田杏花氏、準大賞に瀬田霞泉氏が決定した。

第六十五回東書藝展
各部受賞者名

会員の部

【大賞】

宮田 杏花

【準大賞】

瀨田 霞泉

【知事賞】

中根 静流

【中国総領事賞】

松尾 華景

【原教委賞】

吉戸 清華

【中日賞】

江場由紀子

【東書藝賞】

堀切清之助

【特選】

坂口 朱箭

白井 蘆峰

橋本 秀峰

秋田 清蘭

鳥井 春翠

後藤 楊柳

鈴木 智水

大河内栄州

前田 春崖

岩崎 彩加

小町谷空山

早川 月泉

甲斐千紀子

眞木 綾子

浅野 玉麗

佐賀 薫風

鈴木 素風

黒宮 祥空

背尾 玉燁

遠山 穂光

中根 冬泉

伊神 暁風

木村 紫風

川村 紅葉

今田 春恵

吉永 鳳碩

梶田 邦子

金谷 典子

楠 良平

佐々木治子

伊藤 緑香

伊藤 壽萬子

森 雅竹

佐藤 江月

稲熊 美沙

杉浦 真理

遠山 穂光

中根 冬泉

伊神 暁風

木村 紫風

川村 紅葉

今田 春恵

吉永 鳳碩

梶田 邦子

高木田鶴子

小原 緑水

丹羽 恵泉

鈴木希代美

松井 靖泉

【秀作】

伊藤 芙箭

山田 溪翠

松原 千翠

岡田 豊苑

齊木 孝子

佐藤 麗光

浅川 蘭水

小林 佳麗

前田 善恵

大島 海

稲垣 竹葉

藤堂 秋嶺

恒川 玲舟

岩井 玲翠

伊藤 蕙翠

佐藤 麗光

浅川 蘭水

小林 佳麗

前田 善恵

大島 海

稲垣 竹葉

会友の部

萩原 月菜

清水 玲翠

谷本 愛香

山崎 春霞

伊藤 陽子

一柳 庭華

浦野 博夫

水野 碧友

熊澤 華香

毛利 天岳

今村 香樹

山口 直子

堀場 春陽

神田 遊美

富永 邑璃

飯田 里織

齋藤 花意

川原 妍月

前田知比呂

辻 雪華

萩 豊水

【特選】

山田なつ湖

谷本 愛香

清水 喜雲

山崎 春霞

伊藤 陽子

林 鈴遊

鈴木 香石

水野 碧友

熊澤 華香

毛利 天岳

今村 香樹

山口 直子

堀場 春陽

神田 遊美

富永 邑璃

飯田 里織

齋藤 花意

川原 妍月

前田知比呂

辻 雪華

萩 豊水

【秀作】

大竹 直人

後藤 南星

山崎 春霞

伊藤 陽子

林 鈴遊

鈴木 香石

水野 碧友

熊澤 華香

毛利 天岳

今村 香樹

山口 直子

堀場 春陽

神田 遊美

富永 邑璃

飯田 里織

齋藤 花意

川原 妍月

前田知比呂

辻 雪華

萩 豊水

萩 豊水

公募の部

山本 城北

壬生 秀嶽

田中 航佑

坂田 静麗

須藤 桃花

藤尾 實優

山崎 実央

有坂千代子

高藤 紅泉

杉原 照楓

山下 竹葉

高橋奈津美

阪 緑華

中川 美泉

足立紀代子

石黒 井泉

渡辺 吟花

額 悠太

宮崎みゆき

福岡 勝太

川本 真弓

審査員の先生方

審査委員長

豆子甲水之

審査副委員長

風岡 五城

会員・準会員担当

安藤 清舟

松浦 白碩

土屋 桂華

伊藤 春魁

水谷 紅楓

岩田 冬崖

富永 奇昂

間瀬 清園

渡辺 清香

山本 晴城

江口 雪華

増田 春華

宮本 華楓

久野 北崖

今枝 大軒

木村 大澤

審査員の先生方

関口 峰雲

桜井 春花

須藤 桃花

山本 実央

河原 浩子

大島 弘子

清水 翠晃

千夏

梶 蒼依

長谷川剛士

松枝みどり

萩 蒼依

千夏

梶 蒼依

松枝みどり

萩 蒼依

千夏

梶 蒼依

松枝みどり

萩 蒼依

千夏



会場で審査する先生方

渡辺 清香	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
間瀬 清園	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
富永 奇昂	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
岩田 冬崖	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
水谷 紅楓	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
伊藤 春魁	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
土屋 桂華	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
松浦 白碩	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
安藤 清舟	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
風岡 五城	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
豆子甲水之	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
審査副委員長	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城
審査委員長	宮本 華楓	増田 春華	江口 雪華	山本 晴城

'18 東書藝院人研修会開催

平成三十年二月十一日(日)院人研修会が行われた。今年の会場は東桜会館(東区)で、座席の都合上、参加者九十名限定での開催となった。

開会に先立って山本晴城副理事長より「揚州展」のお礼と「江蘇省友好書道展」の説明がされた。

久野北崖副会長の開会の言葉に続き、講話「篆刻について」、ビデオ鑑賞「漢字について」と今回も二本立ての研修であった。

◆講話

「篆刻について」

講師

東書藝常任理事

梶田稲州先生

篆刻とは篆書を刻すという意味である。認印、実印などを一般に「ハンコ」と呼ぶのに対し、書としての筆意を感じられるものや美しさ、生命感のあるものを「雅印」と呼ぶ。篆刻が書の一分野にあるのは、この筆意のある線質で刻まれているからである。

(3)

篆刻三法とは「字法(詩句や文字を選ぶ。」「章法(行数や配置を考える。印面効果。」「刀法(刀で筆と同様に運刀する。技量)」のことをいい、これらは書作品をつくる過程と同じである。

草稿作りでは印全体の統一感が重要で、文字選びやデザインの工夫をする。「戊」「戎」「成」などよく似た字も多いので、デザインを工夫しているうちに別の字になってしまわないよう注意が必要である。

草稿をつくる上では「黄金比」を意識してみるのもよい。黄金比とは一対一六一八…という比率でエジプトのピラミッド、パルテノン神殿、凱旋門、ピカソの絵画、アッブル社のロゴマーク等にも使われている。

落款(落成款識)においては印の位置が非常に重要で、どこに押すのか熟考する必要がある。その作品に合う印の位置は、一カ所しかなく、千分の一の布置で良し悪しが決まるといわれている。

印泥は艾と朱砂と菜種油によって作られる。朱砂とは硫黄と水銀の天然化合物で近年はなかなか手に入らず化学顔料が含まれているものが多い。いいものは徹底した温度管理のもと一年がかりで手で攪拌させてつくられる。製法によって高価なものから安価なものまで様々である。色は「光明(明るい朱色)：中間色」「美麗(重厚)：濃墨作品に合う」「箭鏃(鮮やかな朱色)：淡墨作品に合う」

などが代表的である。印泥の管理では朱と油の分離を防ぐため、使っても使わなくても月に一、二回練るとよい。また、夏は涼しいところに置き、冷やす、冬は暖かいところに置き、(印も)温めるといふ管理も必要である。

自分の作品の印は自分で押すことを心がけたい。人に頼るのではなく自分で押した方が作品の完成度が高いといえる。押し後はすぐに拭き取って印面は常にきれいに保ちたい。

〈実演〉

草稿作り、布字、刻、印泥の練り方、押印の実演がスクリーンに映され、丁寧に解説された。



◇ビデオ鑑賞

「漢字について―白川 静」

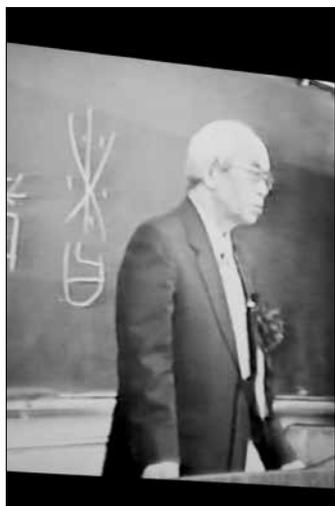
まず木村大澤理事長によってビデオの紹介が行われた。講師の白川静先生（一九一〇～二〇〇六）は漢文学、東洋学者で立命館大学名誉教授（当時）。古代漢字研究の第一人者で『字統』『字訓』『字通』を編集。甲骨文、金文を長年研究し、文字の起源、成り立ちの解明に生涯を尽くした。

このビデオは全三河書道百選展の二十五周年記念の行事として愛知大学で行われた講演である。

白川先生が講演中に語られた、「文字いうものは記号や暗号で

はないのだから、頭の中で理解できるものである必要がある。」

「世界は神秘に満ちており、あらゆるものに神の摂理がありあらゆるものがそれにより意味づけられている。」「文字は単なる情報伝達的手段ではない。文字は本来持っていた原始思想を今日も持ち続けている。そこに書としての可能性がある。書そのものは文字の上になり立つというのが原則である。」「文字というものの性質は本来、神と交渉するための道具でありそれは世界的にそうだと見える。古代エジプトで使われていた文字はすでに滅んでしまったが、これは民族、文化、伝統が減んだからである。東洋の文字は三千二百年前の生命を今日に伝えており、その理解の上に文化というものが考えられる。」などの言葉から、文字や書を崇高なものとする考えを学ぶことができた。(H)



18今日の書展開催

平成三十年一月十日～十四

日、新年最初の書展、中部圏書芸作家協議会・中日新聞社主催、18今日の書展が電気文化会館東・西ギヤラリーで開催された。東書藝一〇九点、以文会五十四点、玄玄書作院七十八点、書典社十七点、計二五八点の出品。東書藝は書典社と共に西ギヤラリーの展示だ。例によって四団体の特色がよく表れて面白い。

書の伝統に根ざした今日の書とは何か。各団体のスローガン、表現はそれぞれ違うが、何より書を愛し、古典を大切に自己の精神の発露を著作を通して探究していく―抽象的であるが共通の理念であるだろう。その具体的結晶である四団体の作品が一堂に会するこの書展は、表現の幅・手法を学ぶ好機であり、実際に他会の方々と直接話せて有意義だった。

九日の搬入終了後にメルパ



ルク名古屋で行われた祝賀会は、東書藝が当番団体で出席者一〇六名。安藤清舟副会長が挨拶に立ち、羽根田菖風常任理事の流暢な司会で心地好く進んで行った。ピアノとバイオリンの演奏も好評で、終始なごやかな雰囲気だった。

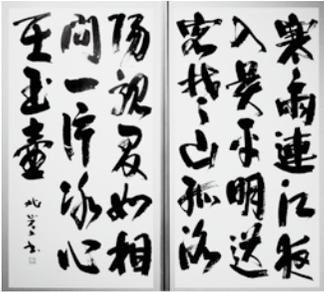
第五十三回 新春東書藝代表作家展

一月二十三日～二十八日

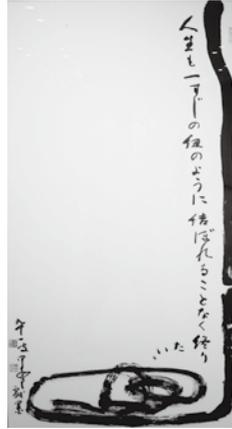


風岡五城会長

電気文化会館東ギャラリーにて新春代表作家展が開催された。大作の形式は今回も継続されて、幹部はじめ気鋭の三十五名が出品。氣宇壮大、筆力十分にこもった力作が並んだ。古典の鍛練から表出した個性はそれぞれに魅力的で、東書藝代表作家ここに在り〴〵の意気が大いに感じられた。写真は幹部の作品。



久野北崖副会長



豆子甲水之名誉会長



安藤清舟副会長



木村大澤理事長

富永奇昂個展「風神雷神」

一月二十日～二月二十五日

本会常任理事・富永奇昂先生個展、「風神雷神」を拝見した。ユニークな会場に広がる独創的な空間は、「篆刻がartだ」の正に富永ワールド。先生から今個展の思いを頂いたので紹介します。

長者町にある目立たなく小さなビルの小さな入り口。

そんな扉の奥に本当にギャラリーがあるのかと疑いつつ扉をあけるとそこには真つ直ぐに伸びた古びた木の階段。ギシギシと音を立てながら登る途中の壁には変な動物達の絵が。

良い意味でとらえれば楽しみながら期待感が高まっていく、



悪く言えばどんどん不安感が募って来る。そんないつもの書道の展示会場とはひと味違った場所での展示でした。

普段は現代美術を扱うギャラリーなので壁に穴を開けたり直接壁に書いても大丈夫との事でしたので、篆刻作品の印影を壁に投影し直接壁全体に大きく描いて篆刻の線質の魅力を体感する作品にしてみました。

たくさんの方に来場して頂き、多くの励ましや御意見を頂戴して自分自身を見直す大変良い機会となりました。

書道界が益々盛り上がる一助となれるよう、一層精進していきますので、今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。



東書藝訪中旅行記 六題

昨年十一月の訪中から早や四カ月余。木村大澤理事長はじめ、六名の方々から紀行文を頂戴出来たのでご披露します(順不同)。拝読すると情景が蘇ってくる。寄稿有り難うございました。

「2017東書藝・揚州市友好書法展」雑感

理事長 木村大澤

十一月二十一日(火)から二十五日(土)まで、中国の南京と揚州を訪れた。今回の主な目的は、「愛知県・江蘇省友好書道展」と「東書藝・揚州市友好書法展」の二つの展覧会の開催と、揚州市との書道交流の礎を作ることにあつた。東書藝にとつては、今年の東書藝展が、第六十五回展という節目を迎えるという事もあつて、これらは当会にとって大変意義深い行事となつた。南京での諸行事は、愛知県が主催ということもあり、江蘇省美術館での展覧会、そして金陵飯店での交流会が盛大に行われた。ここでは東書藝が中心に企画・実施した「揚州展」を中心に述べたいと思う。揚州市は、我々書家にとつては、頭

の中だけは馴染みの深い土地といえよう。清代かの揚州八怪が活躍した文化上重要な、あの揚州だからである。私は、かつて塩貿易で栄華を極めたというその地を直に踏みしめることができ、感慨深かつた。会場となつた「揚州市美術館」はかなり立派な建物、事前に写真で拝見していたが、想像以上にきれいで素晴らしい。会場入口では、大きな芳名帳が用意され大字で記帳、日本では味わえない歓迎を受けた。ロビーも広々として開放的。真っ白な壁が曲面のカーブを描きなんとも美しい美術館である。天井から真っ直ぐに垂れ幕が何本か伸び、その鮮やかな赤が一際目を引く。また、ポスターも当地デザイナーが考案されたであろうか、爽やかな色彩と「絲路書韻」の文字が印象的で会場に掲示、すがすがしい。開会式では多数の高官や書家が

列席、大村愛知県知事のメッセージもビデオで流され、書道の交流の幕開けである。契約締結書が交わされ、今後の方針が確認された。書作品は半切に統一されていて、表具も白を基調としたクリーム色。整然とした中に格式を感じる展示である。書に目を向けると、揚州作家の作品は、やはり中国独特の味わいがある。自由というか、のびのびとして現代的、少々遊び心がある。一方、東書芸の作品はやはり伝統的な書法を重んじた作風が多い。しつかり書き込んだ安定感があるといった感じか。どちらがいいという事は無いが、比較すると日中の違いが分かる。やはり現状に甘んじる事無く謙虚に他国から学ぶ姿勢も大事だと感じた。その後は、幹部による席上揮毫会。様々な書法に触れるひとときとなつた。日中の輪が書を通して広がる瞬間に立ち会えたこと、この上ない幸せであった。夜は、「揚州シャングリラホテル」にて祝宴会。揚州の方々と一緒に時を過ごした。またこのホテルの豪華さは、揚州市の近代化された一面を物語

る。すてきな会場であつた。書の縁で固い絆を結びつつ、夜遅くまで交流の宴が続いた。まさに、日中平和友好条約締結四十年記念にふさわしい交流であつた。翌日は、「大明寺(鑑真記念堂)」「瘦西湖」「東関老街散策」「古運河遊覧」など、揚州市の魅力を存分に味わわせていただいた。書法展と歓迎宴会など公式行事の手配と運営に当たっていただいた「揚州市人民政府外事弁公室」の関係者の皆さんには、心より御礼申し上げます。

中国の旅

大杉花芳

「中国にごいっしょしましょう」安藤清舟先生からのお誘いに二つ返事でお受けしたものの、まだ私は入門三年目。旅に参加された方々は中国との交流の歴史を築いてこられた方ばかり。なのに、皆さん親切でさくばらん。それに、中華料理はかならず円卓で食事をするので、昼食夕食のたびに話の花が咲き、お陰様で五日間楽しく、有意義

に過ごさせて頂きました。

初心者ゆえ、南京と揚州で席書を拝見するのも初体験。日中の先生方の気魄に満ちた揮毫に、心が震えました。また、席書を取り巻く日中の参観者の一面一面を見逃すまいという真剣な眼差しも忘れることができません。中国と日本。国は異なりますが、書道での目指すところは同じなのだと感じました。

旅の参加者のお一人お一人から、書道への熱い思いもお聞きしました。いろいろな刺激を受けた中国の旅。旅に関わってくださったすべての皆様、本当にありがとうございました。

東書藝・揚州市友好書法展に参加して

村 崎 松 筠

十一月二十一日中部空港より上海へ、更に新幹線で南京に向かった。

(7) 南京から専用車で移動する時見た道路は広く何処までも直線で、周囲は二十階以上はあると思われる高層建築が建ち並び、経済発展を目の当たりに感じた。

路肩には「中国夢 我的夢

富強」の小旗が至る所に揚げられ士気を鼓舞している様だった。夕食は「夫子廟」散策後、その中で戴いた。

二十二日江蘇省美術館で愛知県・江蘇省友好書道展が開幕し、大村愛知県知事が開会の挨拶を中国語でされた。その後、中山陵・明孝陵などを巡った。

二十三日は揚州美術館で東書藝揚州市友好書法展の開幕。開会行事の後、日中両国の書法家の模範揮毫があり、大変勉強になった。夕食時のテーブルには、揚州書法院副院長范欽華先生、揚州大学生の倪玉婷さんが通訳ボランティアとして同席され、楽しいお話を聞かせて下さった。また大明寺・老街での楽しい買物も忘れられない思い出となった。最後にこの企画の成功に尽力された先生方に心より感謝申し上げます。

訪中旅行の感動

鳥 居 玉 香

今回初めて友好書法展訪中旅行に参加させていただきました。

盛大な式典に続き、日中代表先生方の席上揮毫も圧巻でした。熱気を帯びた空気の中、情熱溢れる見事な筆さばきに息を飲みました。大きな歓声と拍手、そして会場に広がる笑顔。また展示会場では見応えある作品の数々を鑑賞し、中国書道家の方より、ご自分の作品を紹介して頂きました。書道を通して、日

中友好の文化交流と奥深い書の魅力を存分に堪能出来ました。観光では、中山陵や明孝陵などの世界遺産巡り、古典庭園や古運河遊覧でゆったりと歴史と悠久の時に浸りました。一方で高層ビルが建ち並ぶ近代的な街並みの中で随所にみられる筆文字看板にも目を奪われました。

この旅行を通して参加の皆様方の温かい人柄に触れ、和気藹々と楽しい時間を過ごせましたこと、感謝の気持ちで一杯です。この素晴らしい体験を心の糧に今後も楽しんでいきたいと思えます。最後になりましたが、書法展、旅行準備等ご尽力頂きました先生方、大変御世話になり有難うございました。

南京、揚州訪問記

白 井 蘆 峯

十一月二十一日朝九時、中部空港発のJAL機は現地時間十時四十五分に上海亮港に到着。新幹線で南京市へ。夫子廟を見学。翌日、南京市の江蘇省美術館で愛知県・江蘇省友好書道展の開幕式。午後、中山陵、中華門など史跡を見学し、夕方、交流会。

翌二十三日、専用バスで揚州市へ。揚州市美術館を会場に、東書藝・揚州市友好書法展の開幕式。席上揮毫では中国書法家の楽しそうに運筆している姿に私の心も楽しませて貰った。交流会では中国の青年との屈託のない談笑に更なる友好を予感した。翌二十四日、大明寺（鑑真記念堂）、瘦西湖などを見学。瘦西湖は清朝初期の史跡と広大な景勝地。西大門近くの照春台の傍に毛沢東筆の杜牧の詩碑があった。「青山陰々水遙々／秋盡江南草木凋／二十四橋名月夜／玉人何處教吹簫」。杜牧の情を感じたのだろうか。

翌朝、揚州市から高速自動車

(8) 道で上海市へ直行。中部空港着二十三時。忙しくも楽しい旅でした。

揚州市友好書法展旅行記

林 由 晶

この度は、東書藝・揚州市友好書法展に参加させて頂き、とても貴重な経験となりました。式典に参加をする中で、深く考えずに作品を出品してしまっ

事を恥ずかしく思ったと同時に、出品させて頂く機会を作って頂いた事に感謝致しました。日本と中国の先生方の席上揮毫を拝見し、書法の違いはありましたが、とても勉強になりました。今回学んだ事を生かし、これからの作品制作において、創造力豊かな物にしていけたらと思います。

また、南京での夫子廟、揚州での大明寺、瘦西湖などの観光

でも、書道の本場、中国の書に触れる事が出来て、嬉しく思いました。

参加された先生方と、お話を楽しくさせて頂いて、五日間、とても充実した日々でした。

今回、この様な素晴らしい企画を立てて頂きまして、誠に有り難うございました。

最後になりましたが、東海書道藝術院の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

社中の歩み

◆第33回景雲社「絆」書道展

会期 30年2月14日～21日

主催 景雲社(勝田晃拓)

◆第8回葵友書展

会期 30年3月14日～18日

主催 葵友会(鈴木礼美)

◆第8回有鄰書展

会期 30年3月14日～18日

主催 有鄰会(安藤餘香)

◆第九回幽石書道会展

会期 30年3月15日～20日

主催 幽石書道会(加山幽石)

今後の予定

◆第40回宏道書会选择展

会期 30年5月15日(火)～20日(日)

会場 栄サンシティギャラリー
主催 宏道書会(山本晴城)

◆第25回無名會書展

会期 30年5月15日(火)～20日(日)

会場 名古屋市民ギャラリー栄 8F

主催 無名會(渡辺清香)

◆第60回新道書道会展

会期 30年6月1日(金)～3日(日)

会場 四日市市文化会館

主催 新道書道会(豆子甲水之)

◆平成30年度東書藝総会

期日 30年6月17日(日)

会場 電気文化会館

◆18心象展

会期 30年7月10日(火)～15日(日)

会場 名古屋市民ギャラリー栄 8F

主催 好日社(岩田冬彦)

◆18千代書道展

会期 30年8月17日(金)～19日(日)

会場 桑名市民会館NTN シティ・ホール

主催 書芸八千代会(梶 蘇山)

◆18「今日の書」代表作家展

会期 30年7月17日(火)～23日(日)

会場 中日ギャラリー

主催 中部圏書芸作家協議会 中日新聞社

◆2018東書藝研修会

期日 30年9月9日(日)～10日(月)

会場 名鉄大山ホテル

◆第22回東書藝小品展

会期 30年9月18日(火)～24日(月)

会場 名鉄大山ホテル

◆第61回游心書展

会期 30年9月19日(水)～24日(月)

会場 電気文化会館東ギャラリー

主催 游心書道会(松浦白碩)

◆第52回碩山書院一門展

会期 30年9月22日(土)～23日(日)

会場 蒲郡市民会館東ホール

主催 碩山書院(大竹翠葉) 全振興会

◆第38回飯田書人会展

会期 30年9月20日(木)～24日(月)

会場 飯田創造館

主催 飯田書人会(加山幽石)

◆第19回心書会展

会期 30年10月26日(金)～28日(日)

会場 亀山市文化会館

主催 中央コミュニティセンター

◆第38回飯田書人会展

会期 30年9月20日(木)～24日(月)

会場 飯田創造館

主催 飯田書人会(加山幽石)

◆第19回心書会展

会期 30年10月26日(金)～28日(日)

会場 亀山市文化会館

主催 中央コミュニティセンター

◆第38回飯田書人会展

会期 30年9月20日(木)～24日(月)

会場 飯田創造館

主催 飯田書人会(加山幽石)

編集後記

▽特別な六十五回記念展に入選入賞の皆様、おめでとうございませう。この喜びをどうぞ深く心に留めて糧とされ、益々ご活躍なさって下さい。

平成三十年四月 第一三四号

発行 東海書道藝術院

編集 加藤 松亭

堀江 龍舟